

志賀

古名

黒主

又

志賀黒主

世阿弥作

前

ワキ

官人

シテ

樵の翁

ツレ

樵夫

後

ワキ

前に同じ

シテ

大友黒主

地は

近江

季は

三月

「道ある御代の花見月。／＼。都の山ぞ長閑けき。

詞「そもそも是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても江

州志賀の山路。今を盛なる由承り及び候ふ程に。

唯今志賀の山路へと急ぎ候。

「春の色。棚引く雲の朝ぼらけ。／＼。長閑けき風の音羽山。今朝越え来れば是ぞ此。名におふ志賀の山越や。湖遠き詠めかな。／＼。

詞「急ぎ候ふ程に。江州志賀の山に着きて候。暫く此

所に候ひて花を詠めうづるにて候。

「さゝ波や。志賀の都の名を留めて。昔ながらの山桜。

ツレ「春に馴れてや心なき。

二人「身にも情の残るらん。

「山路に日暮れぬ樵歌牧笛の声。

二人「人間万事様々の。世を渡り行く身の有様。物毎に遮る眼の前。光の陰をや送るらん。

下歌 「余に山を遠く来て。雲又跡を立ち隔て。

上歌 「入りつる方も白波の。く。谷の川音雨とのみ。

聞えて松の風もなし。實にや誤つて。半日の客たりしも。今身の上に知られたり。く。

ワキ詞 「不思議やな是なる山賤を見れば。重かるべき薪に猶花の枝を折り添へ。休む所も花の陰なり。是は心有りて休むか。唯薪の重さに休み候ふか。

シテ詞 「仰せ畏つて承り候ひぬ。先薪に花を折る事は。道

のべの便の桜折り添へて。薪や重き春の山人と。

歌人も御不審有りし上。今更何とか答へ申さん。

ツレ 「又奥深き山路なれば。松も檜原も多けれども。取り分き花の陰に休むを。

シテ 「唯薪の重さに休むかとの。仰せは面白なきよなふ。

二人 「さりながら彼黒主が歌の如く。其様賤しき山賤の。薪を負ひて花の陰に。休む姿は實にも又。其身に応ぜぬ振舞なり。許し給へや上虧達。

ワキ 「こは如何に優るをも羨まざれ。劣るをも賤しむな
との。古人の捷は誠なりけり優しくも。古歌の喻
への心を以て。今の返答申したり。

シテ 「いや／＼古歌の喻へとやらんも。更々知らぬ身な
れども。賤しき身にも思ひよりて。

ワキ 「彼大友の黒主が。心を寄する老の波。

シテ 「和歌の浦わの藻塩草。

ワキ 「かく喻へ置く世語の。

シテ 「それは黒主。

ワキ 「是は誠に。

シテ 「さまも賤しき。

ワキ 「山賤の。

地 「身には応ぜぬ事なれど。許させ給へ都人。とても
の思出に。花の陰に休まん。實にや今までも。筆
を残して貫之が。言葉の玉のおのづから。古へ今
の道とかや。／＼。

「夫れ賢かつし時代を尋ぬるに。延喜の聖代の古へ。

国を恵み民を撫でゝ。万機の政を治め給ふ。

シテサシ「然れば其御時に至つて。和歌の道盛んにして。古へ今の詠歌を撰び。

地「二聖六歌仙を始めとして。其外の人々は。野辺の葛のはひゝろごり。林に茂き木の葉の露の。色に染み行く歌人の。心は花になるとかや。

シテ「實に埋木の人知れぬ。

地「ことわざまでの情とかや。

クセ「そもそも難波津浅香山の。影見えし山の井の。浅くは誰か思草の。露行き霜来る色なれや。浜の真砂より。数多き言の葉の。心の花の色香までも。妙なりや敷島の。道有る御代の翫び。然れば三十一文字の。神も守護し給ひて。無見頂相の如来も。感応垂れ給へば。君も安全に。万民時を楽しみて。都鄙円満の雲の下。四海八洲の外まで

も。波の声万歳の。響きは長閑けかりけり。

シテ
「今天皇の御代久に。

地「万の政の。道直ぐに渡る日の。東南に雲をさまり。

西北に風静かにて。言葉の林栄ゆくや。花も常磐の山松の。巷にうたふ声までも。是れ和歌の詠に漏るべしや。天地を動かし。鬼神も感をなすとかや。

ロンギ地

「実にや異なる山賤の。くく。家路いづくの末なら

ん。ゆかしき心なるべし。

シテ
「今は何をか包むべき。其いにしへは大友の。黒主といはれしが。時代とて此山の。神とも人や見るらん。

地「そもそも此山の神ぞとは。不思議やさては大友の。

シテ
「それは黒主が家の名の。

地「大友か。

シテ
「我はたゞ。

地「薪負ふ友もなくて。独り山路の花の陰に。長休み
しつる恥かしやと。夕べの雲に立ち隠れて。志賀
の宮路に帰りけり。／＼。（中入）

ワキ歌
「いざ今日は。春の山辺にまじりなん。／＼。暮れ
なばなげの花の陰。月に詠じて天の原。時の調子
に移り来る。舞歌の声こそ新なれ。／＼。

後ジテ
「雪ならば幾度袖を払はまし。花の雪吹の志賀の山。
越えても同じ花園の。里も春めく近江の海の。志

賀辛崎の松風までも。千声の春の長閑けさよ。海
越に。見えてぞ向ふ鏡山。

地「年経ぬる身は老が身の。

シテ
「それは老が身これは志賀の。

地「神の白木綿かけまくも。忝いや神楽の舞。（神舞）

ロンギ地
「不思議なりつる山人の。／＼。薪の斧の永き日も。
残る和光のあらたさよ。

シテ
「實に惜しむべし君が代の。長閑けき色や春の花の。

塵に交はる雪ならば。踏む跡までも心せよ。

「実に心して春の風。声も添ふなり御神楽の。

シテ
「小忌の衣の色はえて。

地
「花は梢の白和幣。

シテ
「松は立枝の。

地
「青和幣。かくるやかへるや梓弓。春の山辺を越え
来れば。道も去りあへず散る花の。雲の羽袖を返
しつゝ。紅の御袴のそばを取り。拍子を揃へて神

かぐら。実に面白き奏かな。く。